Title	僧正遍照：その詠歌の特質をめぐって
Sub Title	Sojo Henjo : Some comments on his poetry
Author	川村, 晃生(Kawamura, Teruo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1980
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.41, (1980. 12) ,p.1- 23
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00410001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

僧 正 遍 照——その詠歌の特質をめぐって——

川 村 晃 生

これまでに遍照及びその集に関して論じられたものとして、増田繁夫「遍照伝攷—古今集研究の一—」(『甲南大学文学会論集』28、国文学篇第5集、昭40・11)、阿部俊子「僧正遍照集」(『歌物語とその周辺』—風間書房、昭44—所収)、島田良二「僧正遍照集」(『平安前期私家集の研究』—桜楓社、昭43—所収)、蔵中スミ「歌人遍照・素性父子の和歌をめぐって—伝承と受容の問題—」(『帝塚山学院短大研究年報』25、昭52)等の御論考を挙げることができる。すなわち、遍照の出自及び経歴などの伝記上の問題や、家集『遍照集』の本文上の諸問題、或いはまた素性詠歌との関係といった問題は、右の諸先学によって切り拓かれ整理されてきたと言えよう。また遍照の詠風については、つとに藤岡作太郎(『国文学全史、平安朝篇』第一期第七章)にすぐれた指摘がある。或いはまた『古今集』所収歌に関する諸注釈書の所論も見逃せない。本稿では、それらの成果を指標として念頭に置きつつ、『遍照集』の内部に立ち入って遍照詠歌の特質につき考察を及ぼしたく思う。そして、それによって僧正遍照という歌人をその時代及び和歌史の中でどのように位置づけたらよいのか、ということへの見通しを立てておきたいと思うのである。なお、以下に考察の対象として用いる『遍照集』本文は、諸事情をかんがみ、『私家集大成』(中古I)所収の△遍照ⅡⅤの一〜三五とし、歌意の汲み難い個所などは、適宜他本や勅撰

集などを参考とした。

一

一般的に言つて、遍照という歌人が当代歌人の中で或る特殊な位置を占めていたということは、広く認められるところであろう。たとえば、△洒脱性▽とか△実少なし▽といった彼についての評言は、彼の詠風を語る場合の常套句であり、またそれが的外れていないことも確かである。このような遍照評は、おそらく「歌のさまは得たれどもまこと少なし」という、周知の『古今集』仮名序にみえる評言に端を發していると思われ、なおかつそれは今日においても有効である。後に詳述する如く、稿者もこのような△遍照的なるもの▽を重要視する必要があると考えている。しかし、そういうった遍照の独自性を語る前に、少しく確認しておかなければならないことがある。それは、遍照の詠歌の中には、そのような独自性とともにも或る種の古代性なり時代性が併存しているということである。それはごく当然のことではあるが、まずそれにつき二、三の例を引きつつ述べておきたい。

1 花の色は霞にこめて見せずとも 香をだにぬすめ春の山風

この一首は、『遍照集』巻頭を飾る周知の一首である。『古今集』（春下、九一）には作者名が良岑宗貞とあるから出家以前の作と目されるが、『奥義抄』（盗古歌証歌）によるとこの歌には手本がある。すなわち、小野篁のA花の色は雪にまじりてみえずとも 香をだに匂へ人の知るべく

という一首である。篁は遍照より約一五才程年長であるから、『奥義抄』の指摘する如くもしA歌が篁作とすれば、遍照詠は篁詠から影響を受けたものと見做した方がその確度は高いであらう。

ところが、このような関係が、実は遍照と後統の歌人との間にも見い出されるのである。

2 あさみどり糸よりかけて白露を 玉にもぬける春の柳か

これもまた周知の一首であるが、この一首は次の伊勢の詠に影響を与えているものと思われる。

B 青柳の枝にかかれる春雨を 糸もて抜ける玉かとぞ見る (延喜二三年三月一三日亭子院歌合、春)

柳―糸、露―玉という万葉以来の表現類型の中で、露を春雨としたところが伊勢詠の新味であろうが、いずれにせよ伊勢詠が遍照詠から影響を受けていることは、その成立年時からみてもまず間違いない。⁽²⁾

右の二点から、遍照詠の中には、彼と同時代もしくは近接する時代の歌人達との間に微妙な影響の授受関係をみるこ
とができるものがあると言えよう。その意味で、次の一首は注目に値する。

35 我宿は道もなきまで荒れにけり つれなき人をまつとせしまに

この一首は、「我宿は雪降りしきて道もなし 踏み分けて問ふ人しなれば」(古今、冬、三三二一、よみ人しらず)と類
想の歌と言うことができる。作者がへよみ人しらずVであることからすると、この詠風は古今前夜に流行したものの一
種と推測することが可能である。しかも、くわえて右の遍照詠は、次掲の小町詠と同類の表現類型とみることができ
る。すなわち、周知の

C 花の色はうつりにけりないたづらに 我身世にふるながめせしまに (古今集、春下、一一三)

の一首と比較するならば、「――けり、――せしまに」という表現形式において共通することが明らかである。ほぼ同
時代歌人と見做し得る両者の間に如何なる形の影響関係を認めたらよいのか、その判断はまことに難しい。ただ少なく
とも、右の如き「――けり、――せしまに」という表現形式が六歌仙時代までに成立し、当代の詠風の基調の一端を担

ったことだけは認められるであろう。そのような意味で、遍照は古今今夜という和歌史上の時代の担い手であり、まさにその時代の歌人であったと言える。

このような遍照詠の△時代性▽という性格は、また別な点からも指摘できる。たとえば、

20里は荒れて人は古りぬる宿なれや 庭も籬も秋の野らなる

28秋山の嵐の声を聞く時は 木の葉ならねどものぞ悲しき

という二首について考察してみたい。まず、20の第五句にみられる△野ら▽という語句は、平安以降の和歌作品に頻用されるものではなく、左の如くわずかに『万葉集』中に数例の使用をみるだけである

二七六三 紅の浅葉の野らに刈る草の 束の間も吾を忘らすな（卷十一）

二四七七 大野らに小雨降りしく木の下に 時と寄り来ねわが思ふ人（卷十一）

八代集中の△野ら▽の使用例は、右の遍照詠（古今集、秋上、二四八）のみであり、その意味で同首は以後の文学作品に（目立った存在として）若干の影響を及ぼすが、ともかく遍照詠作時に戻ってその意義を考察するならば、それは右記の例からして万葉時代の表現の影響を色濃く受けているということになる。一方、28の歌についても同様なことが言える。すなわち、同首初句に見られる△秋山▽という語は、大雑把な把握を以てやや図式的に言えば、『万葉集』中に多く見え、平安末期から鎌倉期にかけてやや復活するが、大勢として平安朝期には余り多用されなかった歌語である。とすればこの△秋山▽という語も、万葉的な色彩を濃厚に帯びている表現と言つてよいであろう。

このように、遍照詠の中には未だ万葉の名残をとどめている表現がいくつも見られるのであり、いわば古代的な翳りの中に遍照を位置せしめることも一面において可能であろう。そうしてそのこと自体、六歌仙時代という和歌史上の一

時代を特色づけてもいると言えよう。

以上述べ来たった如く、遍照詠における時代性（古代性）という性格は複数の観点から指摘することができるのであり、まずそのことを確認しておきたいと思う。そして、それをふまえた上で遍照の特異性について考察を及ぼしたい。

二

遍照詠における表現の新しさとも目すべきものは、たとえば左の如き一首に求めることができる。

ひえの山の舎利会にのぼりてかへるに、桜の花を見て

5 山風に桜吹きまきまきみだれなん 花のまぎれに立ちとまるべく

この歌の第二句「吹きまき」は、古今集注釈書類（離別、三九四）において、「吹きまくって」の如き意味内容の語と解されるが、この語は『万葉集』には見られず、八代集においても『新古今集』に二例（五〇六、五五八）を検出し得るにすぎない。すなわち、

秋風の袖にふきまく嶺の雲を つばさにかけて雁もなくなり（家隆）

おのづから音するものは庭のおもに 木の葉吹きまく谷の夕風（清輔）

の二首であるが、この新古今の用例の背後には、少なくとも遍照詠への意識を看取してよいであろうし、とすれば同語が遍照の造語かと疑いたくなる程、それは遍照独自の表現と言えよう。事情は第四句「花のまぎれ」についても同様である。この語は通例「花で道が分らなくなる」意とされるが、この語も他にその使用例を聞かず、遍照詠における独自表現と見ることができよう。このように、同首には二句にわたって新しい表現法を認めることができるのであり、それが

同首を同時代詠の中で際立ったものとしていのである。

しかし、そのような独自性はそれとして、本来遍照詠が持っている表現上の独自性というものは、右の如き性質のそれとはやや異なった点に求められるように思われる。たとえば、再び家集巻頭歌を引くが、

1花の色は霞にこめてみせずとも 香をだにぬすめ春の山風

という一首を検討してみたい。同首は既述した如く、篁詠に類想の歌があり、それなりの時代色を帯びているのであるが、同時に（篁詠と比較せずとも）遍照的色彩を濃厚に感じることができよう。それは一にかかって、 $\wedge$ ぬすむ $\vee$ という表現に帰せられるものである。この俗語的表現は、言うまでもなく歌語としては認め難いものである。八代集における $\wedge$ ぬすむ $\vee$ の用例は、この遍照詠を除いては僅かに『詞花集』（夏、五二、源俊賴朝臣）に、

D雪の色をぬすみて咲ける卯の花は さえてや人にうたがはるらむ

の一首がみられるのみである。D歌においては、 $\wedge$ ぬすむ $\vee$ と $\wedge$ うたがはる $\vee$ とが縁語の關係にあり、またこのような俗語的（口語的）表現は俊賴的とも言えるのであろうが、いずれにせよ遍照の時点での $\wedge$ ぬすむ $\vee$ という語の和歌への流入は、かなり目新しいものであったに相違ない。『古今集兩度聞書』が「ぬすむといふ事、當時はおもひはからふべし」と述べているのは、その辺の事情を指しているのである。この $\wedge$ ぬすむ $\vee$ は、第二句の $\wedge$ こむ（つつみかくす――時代別国語辞典） $\vee$ に対する形で使われているのであるが、一方これは、すでに小島憲之氏の御指摘にある如く、その源泉を唐詩特に白詩に求めることができる表現である。そこで考えを及ぼさねばならないのは、遍照の出自であろう。すなわち、遍照が『経国集』以下種々の作物の撰修に携わった大納言安世の子であるという点であり、おそらく幼少時より学問的環境に恵まれた中で育ったという点である。現に遍照は、『三代実録』（元慶三、開十、十五。同八、九、十。

仁和元、二、十三の各条)によれば、上表文などを草しており、その詩文的素養の一端をかいまみることができるとすれば、彼が右掲の如き表現を和歌の世界にとり入れてくることは蓋し当然なのであり、したがってこの入ぬすむVという語の使用は、一方で口語的世界を示しつつ、他方で漢詩的世界を背景としていたということが出来る。それらの意味で、この一首は新しい和歌世界を切り拓いたと見られよう。また、このような新趣向による歌が、広く人々の間でもてはやされたであろうことは想像に難くない。『後撰集』(春中、七三)の

寛平の御時、花の色霞にこめてみせずといふ心をよみて奉れとおほせられければ

山風の花の香かどふふもとには 春の霞ぞほだしなりける

という藤原興風詠は、遍照詠成立よりまだ間もない頃であるはずの宇多天皇文化圏における遍照詠の受容を如実に物語っている。

このような口語的表現の使用は、たとえば次の一首についても指摘することができる。

8 今来むといひて別れし朝より 思ひくらしのねをのみぞなく

この一首は、『古今集』(恋五、七七一)の他に『拾遺集』(物名、三七〇)にも入集している。⁽⁶⁾ 後者において物名(ひぐらし)の部立に分類されていることからすると、この歌の技巧は入思ひくらしのVという第四句の表現方法に求められるかもしれない。しかしこの歌の特質は、むしろ初句入今来むとVという表現に認めるべきではなからうか。この入今来むとVという表現は、遍照の子素性法師の

E 今来むといひしばかりに長月の 有明の月を待ちいでつるかな(古今集、恋四、六九一)

の一首の成立におそらく影響を与え、以後の「今来むといひて」という表現類型の先蹤となった。たとえば

「今来むといひしばかりを命にて 待つに消ぬべきさくさめのとじ」(後撰集、雜四、一二六〇)

G 今来むといひて別れし人なれば かぎりと聞けどなほぞ待たるる (大和物語、五十五段)

など初二句をほぼ同じくする歌が、のちに陸統と詠み出されてきている。ところで、この「今来む」といふ表現は、実はまぎれもなく口語なのである。それを明らかに物語る例は、『蜻蛉日記』に求められる。すなわち、同書天徳元年八月頃の条に、

こなる人、片言などするほどになりてぞある。出づとは、かならず「いま来むよ」といふも、聞きもたりてまねびありく。

と見えて、幼い道綱が、兼家が婦りがけに必ず口にする「今来むよ(おっつけやうよ)」ということばを聞き覚えて、口真似をしている様子を伝えている。この例からして、「今来む」といふ語句は、男が後朝に女と別れて家を出ていく時の常套句なのであり、だから遍照詠以下G歌に至るまで「今来むといひて、」なのである。『大和物語』(一六八段)に「いと色好みになむありける」と伝えられる遍照にしてみれば、このような後朝の会話は日常のものだったはずである。遍照はその日常の口語をそのまま歌の初句に置いたのであるが、それが後代の歌人達にいかにも新鮮な感じを与えたかは、既掲の数首における受容の具合からして明らかである。

同様な点、すなわち、遍照詠における口語的表現につきもう少し指摘しておきたい。たとえば『遍照集』(二二三―二六六)には、四首連続して配列される女郎花詠歌群がみられる。煩瑣を厭わず、まずそれらを列記しよう。

さかの侍りける法師の房にせさいの侍りけるを、女どもの立ち寄りて見侍りしかば

23 ここにしもなに匂ふらん女郎花 人のもの言ひさがにくき世に

さうく、しう侍りしかば、ものへまかりはべりし道に、女郎花の侍りしをおよびて折り侍りし程に、馬より落ちてふしながら

24 名にめで、いろを見て折れるばかりぞ女郎花 我落ちにきと人に語るな

25 花と見て折らんとすれば女郎花 うたたあるさまの名にこそありけれ

26 秋の野になまめき立てる女郎花 あなことごとし花もひととき

右四首のうち25は、『古今集』（誹諧歌、一〇一九）において（読人しらず）歌群の中に配置されているから、遍照詠であるかどうか甚だ疑わしい。よってひとまず対象から除外する。そこで他三首について見てみると、次のような際立った特質を指摘できる。

まず23の下句へ人の物言ひさがにくき世にVは、中にへさがVに地名へ嵯峨野Vを詠み込んでいるため、いささか無理な表現となっているが、このへ物言ひ（風評・噂）Vとかへさがにくし（意地悪い）Vといった語は、和歌表現に頻用される用語であるとは言えず、どちらかと言えば口語的表現であろう。とすれば、同首はあたかも会話するかのような調子で相手の女性達に語りかけられたものと見る事ができる。

次に24の第四句へわれおちにきVは、通例古今集注釈書類においてはへ墮落するVの意と解されるが、ここでは詞書に「馬より落ちて」とある状況を直接に指しているのであらうから、第一義にはその意をあてるべきであらう。（し）いずれにせよ、「我落ちにき」は口語的性格を色濃く持っている表現と言うことができ、語り口調をそのまま第四句に置いたと見做し得るのである。

或いは又、26の第四句へあなことごとしVについても同様なことは言える。同首は『古今集』（誹諧歌、一〇一六）に

おいて、多く第四句を△あなかしがまし▽として伝えられるが、いずれにしてもそれらは口語的表現と言え、女郎花に對して話しかけるような調子を読み取ることができる。竹岡正夫氏（『古今和歌集全評釈』下、当該歌の△釈▽の項）も、△「あなかしがまし」は話し言葉の口調である▽と述べて、その口語的性格を指摘しておられる。

このような視点から再び女郎花詠歌群を考察してみると、25番歌（『古今集』詠人しらずの歌）があたかも遍照詠であるかの如く同歌群に配置されているのは、よく首肯し得るところであろう。それは、同首第四句△うたたあるさまの▽という表現に口語的性格を見ることができるところである。これについては、竹岡氏（前掲書、当該歌の△釈▽の項）が「うたて」という表現と比較しつつ詳細に論じられており、これを「和歌らしからぬ俗語表現」とされている。

右四首の内容上の特質については後述するところだが、それらが持っている口語的、俗語的表現という基本的性格については、以上に述べ来たたとおりである。このように見てくると、女郎花詠に限らず、遍照詠には濃厚に口語的性格が存していることに気付かされる。そうしてこのことは、遍照和歌の本質と深くかかわり合っていると思われるが、それについて述べる前にもう少し別の遍照詠の特質について触れておかなければならない。

三

おそらく遍照詠の中で最も人口に膾炙しているのは、『百人一首』に撰入されて一層知られるところとなった、

五節の頃、舞姫を見侍りて

10天つ風雲の通ひ路吹きとぢよ　をとめの姿しばしとどめむ

という一首であろうと思われる。この歌に関してはずでに様々な評がくわえられ、今それ／＼を再説する暇もないが、

この歌が遍照詠の特質を或る意味で具現していることはまず確かであろう。同首を遍照のおもて歌として『百人一首』に選んだ定家も、この歌に少なからず遍照らしさを見ていたからであるに違いない。その遍照らしさの一つは、この歌がどのような形にして詠まれたかということに深くかかわっている。すなわち、同首が詞書にある如く、五節の舞を見物しながら詠まれた即詠歌であるということを見過してはならないであろう。『年中行事絵巻』(巻五、内宴)はその巻尾に八妓女の舞御覧の図を掲げている。そこには綾綺殿西廂で舞う妓女六人を近衛府の舍人達が松明をもって照らし、その右方にはそれを紫宸殿北ノ戸辺りから見物する公卿や殿上人達が描かれている。この図柄を眺めると、右の遍照詠もこのような雰囲気の中で詠まれたものと想像されてくる。つまりこの歌は、五節の舞の興に乗った遍照が、舞姫伝説を下敷として機知的に詠み下した即興詠であるという面が強い。そうしてその即興性がこの歌の一つの生命なのであり、それを抜きにしてこの歌の特質を語ることはできないであろう。

ところで、この歌にはもう一つの遍照らしさを見ることができるといえる。それは、すでによく言われているところであるが、洒脱性ということに集約されるものである。舞っている女性達の美しさに魅かれて、それをもう少し見ていたいという願望やその表明は、受け止め方によっては俗っぽい感じを与えないことはない。現に契沖は、この歌が『古今集』(雑上、八七二)において作者名を良岑宗貞としていることに関し、「ことに僧に似つかはしからねば俗名を書けり」(『百人一首改観抄』)と述べている。この物言いはいかにも契沖的であるが、要するに右の如き遍照の振舞を僧らしからぬものと見ているのである。その点稿者は全く立場を異にするが、このような女性とのかかわりを戯れとしてさらりと云っているのは、遍照詠の一つの特質であり、それを洒脱性というふうに捉えることも可能であろう。そうしてそれは、遍照という人間の本质と深く関わっているはずである。

このように、遍照の「天つ風」詠は、△即興性∨と△洒脱性∨という二つの視点からの分析が可能であり、同時にそれは遍照詠全体を捉える上での一つのキーポイントにもなり得ると思われる。そこでまず、即興性ということについて述べておきたい。『遍照集』中に、

春、花山に亭子法王御幸ありて、とくかへらせたまひなむとせしときに

6待てといはばいともかしこし花山に　しばしと鳴かむ鳥の音もがな

という一首がある。同首は、遍照の住む花山に宇多天皇が御幸あつた折、帰途につこうとされた天皇を引きとどめようとしてその場で詠まれた即詠歌である。特定の対象を引きとどめようとする点では、既掲の10番歌と同類であり、いずれにも△しばし∨という共通表現が見えている。この歌は、まず人が帝（詞書には法皇とあるが、時代的には天皇が正しい）を留めようとするのは力の及ばないことであることを前提とし、つぎに地名の△花山∨に引かれて、花山であるならば人よりも鳥が引きとどめた方が相応しいという機知に基いている。そして『遍照集』には、これと同タイプの歌が少なからず存する。たとえば右の歌につづいて配置される、

おなじ山に人のまうで来て、夕つ方帰りなんとせしかば

7夕暮の籬は山となりななむ　夜は越えじと宿りとるべく

の一首も同類である。上句はやや大仰な機知だが、このような誇大な比喻表現は当時むしろ一般的なことであつた。この歌について松田武夫氏（『新釈古今和歌集』上、当該歌の△評∨の項）は、「おかしみと軽味をまじえた遍照らしい歌である」と述べ、竹岡正夫氏（前掲書、当該歌△評∨の項）も、「上の句はずいぶん大胆に夸飾に言い切つて、いかに遍照らしい歌である」と指摘され、いずれもこの歌に遍照らしさを見ておられるが、一步踏み込んで言えば、このよ

うなタイプの歌を即詠するところ、真の遍照の手際と言うべきではなからうか。

またくわえて、

志賀より帰り侍りし人々、花山に入り侍りて藤の花を見侍りしに

33よそに見て帰らむ人に藤の花 はひまつはれよ枝は折るとも
という一首についても同様な点を指摘できる。既掲の6番歌との比較で言えば、6の鳥をここでは藤の花に変えただけで、趣向及び即詠性という性格においては全く共通する。下句ハはひまつはれよ枝は折るともVという部分は少々戯れ歌的な感を与えるが、のちに『古今集両度聞書』がこの歌に関して、「遍照は少しざれたる歌侍るにや」と言っているのは、その辺の事情を指しているのであろう。

このような遍照詠における即興性が最も端的に表われているのは、集中唯一の連歌である、

内裏わたりに侍りし時、人に来むとためて夜の更くる程に、うしみつと奏するをききて、女のもとより

9a 人心うしみつ今はたのまじよ

といひたれば

9b 夢に見ゆとやねぞすぎにける

に見られる応酬である。このやりとりにおける技巧は今指摘する要もないであろう。すでにこの連歌について阿部秋生⁽¹⁰⁾氏は、遍照の飄逸性とともに返歌のもつ切れ味の良さを指摘された。この御指摘に全く異論はないが、その意味で言えば次の贈答も遍照の面目躍如たるものをうかがわせている。

(略) いとさむきを、御声聞き侍ればたのもしくなん、御衣ひとつかし給へ(小野小町)

17 いはの上に旅寝をすればいと寒し 昔の衣を我にかさなん

といへるかへりごと許を

18 山ぶしの昔の衣はただひとへ かさねばうとしいぎ二人寝む

両首は『後撰集』（雑三、一一九六―七）や『大和物語』（二六八段）等に収載されて、すでに周知のものであり、こと細かにこの贈答歌の性質を再説する要はない。折口信夫の評「二人の間に特別の関係があるようにみられるけれども、これは歌をやっただけで、関係が成り立っているのではない。冗談を言いかけたのだ」〔折口信夫全集ノート編〕12、二九三頁）や、「遍照の歌が酸いも甘いも知っている態度で作っているからわかるが、僧正のほうに性的の笑いをこめて心やすだてにしている」（同書4、三〇一頁）が全てを言い尽しているであろう。この贈答には、遍照詠における即興性とともなう洒脱性をも見てとることができると言えらる。

右の如き即興性と洒脱性の共存は、実は前掲の女郎花歌群についても指摘できる。詞書から歌の成立事情を推察せられるのは23・24の二首であるが、いづれもその場での即詠であり、即興性を色濃く帯びている。一方、これらの女郎花歌群に共通して指摘できることは、いづれも女郎花を女性に見立てていることである。女郎花は、すでに『万葉集』中において、「佳人部為」「美人部師」「娘子部四」等々記されて女性への連想を見ることができ、また同集（巻十、二二七九）の、

わが郷に今咲く花の女郎花 堪へぬ情になほ恋ひにけり

といった一首には、女性の比喩としての女郎花という捉え方の萌芽を指摘することができる。くわえて次の一首

僧正遍照がもとに、奈良へまかりける時に、男山にて女郎花を見てよめる 布留今道

女郎花憂しと見つぞ行きぐる 男山にし立てりと思へば (古今集、秋上、二二七)

などが、遍照の時代においての、女郎花を素材としたこの種の詠風の流行の有様を物語っている。このような流れの中に遍照詠を位置づけて考察してみると、やはり既述の口語的性格を有しているという点で際立った存在と見ねばなるまい。それは、あたかも日常女性に語りかけるかの如き調子ですべて詠まれているのであり、そして何よりも、この種の歌を僧籍の歌人が詠んでいるということが注目されねばならないであろう。これが、遍照詠の洒脱性という性格の表われでもあると言えようが、ともかくそれは当代において遍照ぶりの一典型として受容されたのであろう。このように考えてみると、既掲の25番歌(読人しらず歌)が遍照集の中に収録される理由も納得されるのである。

以上述べ来たった如く、遍照詠は∧即興性∨とか∧洒脱性∨といった性格を基本的に有していると言える。そして、これらの性格は遍照詠における口語表現という特質と深くかかわっていると言いうことができよう。それは、和歌表現の約束事(歌語・雅語の類)に縛られることなく、自由に自らの思考や感情を表明するという点において共通するはずだからである。とすれば、遍照にとってこの種の詠歌は深刻に案出する類のものではなかったと思われる、その意味で増田氏が「遍照にはどうも歌を狂言綺語とする、少くともはっきりたはぶれ言とする意識があったやうである」と述べておられるのに従うべきであらう。右の諸点からして、遍照詠歌の一つの本質を形造るものとして、口語的表現、即興性、洒脱性等の性格を挙げることができると思われる。

四

ところで、遍照の和歌の中にはそれらとはやや異なった性格を有する歌が一つのグループを形成しており、彼の詠歌の特質として指摘できるのである。それは、僧籍という生活環境から来る、多分に仏教的色彩の濃いものであり、それらを分析することによって遍照の仏教者としてのあり方を見ることが可能なのである。

この仏教的詠歌が顕著に見えるのは、言うまでもなく出家直後と覚しい時期である。遍照の出家は、仁明帝の崩御や藤氏勢力の伸張など様々な原因が推測されているが、嘉祥三（八五〇）年三月廿八日遍照三十五才の折であることは明らかであるから、その詠歌に仏教性が盛り込まれてくるのは、主にそれ以後のことと見てよいであろう。たとえば、家集において、比叡山で出家した直後に親のもとへ髪とともに遣わされたとされる、

11 たらちねはかかれとしてもむばたまの 我が黒髪をなでずやありけむ

という一首は、出家による親への断ち難い慕情を詠んだものであり、またこれにつづいて配列される、

12 いまさらに我はかへらじ滝見つゝ 呼べど聞かずと問はゞ答へよ

という一首は、遍照の初期の修行のさまを語るものとして注目される。同首は『後撰集』（雑三、一二三九）に入集して「山ぶみしはじめける時」という詞書が付されており、これに信を置くならば出家直後山踏みの修行を行っていたものと思われる。歌中の滝がいづれの地のものか今は知り得ないが、滝が修行に特別な意味合を持っていることは、花山院やのちの西行の那智籠り（『山家集』雑）などから明らかであり、右の遍照詠も山踏みの修行の一端をうかがわせている。

出家から一年後、遍照は知人が喪から解けて官位を授けられなどしているのを聞き、

16 みな人は花の衣になりぬなり 昔の袂よかはきだにせよ

と詠んでいる。事情は『古今集』（哀傷、八四七）に詳しいが、この頃遍照は自らが僧として全く別世界の人になっていることを痛感していたと思われ、その表明が右の一首となったのである。

さて、右掲の12と16の間には二首の無常感を詠じた歌がみえる。すなわち、

夕暮にくものいとはかなくすがくを見侍りて、常よりもあはれに見侍りて

14 ささかにの空にすがくも同じこと またき宿にもいくよかはふる

世のはかなさもいとど思ひ知られ侍りしかば

15 末の露もとの雫や世の中の おくれさきだつためしなるらむ

という二首である。両首はいずれも『新古今集』（雑下、一八一七／哀傷、七五七）に入集しているが、それ／＼無常感を基底に据えていることは歌意からして明らかである。前者が比喻や表現趣向の上で、

世中はとてまかくても同じこと 宮もわら屋もはてしなれば（新古今集、雑下、一八五一。蟬丸）

の一首と類似していることは注意すべきだが、蜘蛛の巣を素材として無常なる世を明確に詠み出し得ていると言えよう。また後者も同類の歌であり、久保田淳氏（『新古今和歌集全評釈』当該歌へ鑑賞Vの項）が「観念的であると同時に具象的な一、二句から、無常の観念を導き出す表現技巧は洗練され、流麗である。後代の能説の説経師の願文表白を和様な表現で聞くような趣がある」と評されたのはよく適っていると言えよう。

このように無常感を基本的性格として持つ歌は他にもいくつか指摘できる。たとえば、

くたにを題にて

31 散りぬれば庭のあくたになる花を 思ひしらずもまどふ蝶哉

という一首も、物名歌でありながらも、花の移ろい易さを素材として無常転変の世界を詠んだものである。その意味では既掲の

26 秋の野になまめき立てる女郎花 あなことごとし花もひととき

の一首にも、同種の響きを読み取ってよいであろう。

以上の他に、仏教的性格を帯びる詠歌としては、

蓮に露のおきたるを

34 蓮葉のにごりにしまぬ心もて 何かは露を玉とあざむく

の一首を挙げ得る。この歌は、すでに指摘されている如く、「不_レ染_三世間法_一、如_三蓮花在水_一」（法華経、湧出品）を下敷としていたのであるが、この蓮と露という取り合わせは古くから好まれたものらしく、『万葉集』（卷十六、三三三七）に、

ひさかたの雨も降らぬか蓮葉に たまれる水の玉に似たる見む

の如き例が見えている。折口信夫は、この遍照詠を俳諧歌だとしており（『折口信夫全集ノート編』12）、確かにそのよ
うな側面も否定し得ないが、法華経との関係が指摘される以上、釈教歌の側面も看過することはできないであろう。⁽¹²⁾ 或
いはまた次の一首

二月ばかりに道をまかるとて

3折りつればたぶさにけがるたてながら 三世の仏に花たてまつる

これも遍照と仏教的世界のかかわりを示すものとして注目してよからう。すでに言われる如く、これは『三代実録』(貞観十六年三月廿三日条)に見える「山林自笑ノ花、三世ノ仏ニ供スルニ足レリ」と同一の表現であるが、同首は和歌史的に見れば、仏に献花することを詠む例のごく初期のものと思倣される。たとえば、

たてまつる蓮の上の露ばかり これを哀れにみよの仏に (今昔物語、卷廿四第四十九)

広修供養(以下略)

さししながら三世の仏にたてまつる 春咲く花も秋の紅葉も(発心和歌集、八)

等の歌の成立に影響を及ぼしており、事情はやや異なるが、西行の、

仏には桜の花をたてまつれ わが後の世を人とぶらはば(千載集、雑中、一〇六四)
なる一首の成立に深くかかわっている。⁽¹³⁾

以上の如き諸例は、出家後の遍照が僧としての生活の中で自らの体験や思考をもとに詠みついたものと言える。その意味で遍照の出家という行為は、彼の詠歌生活にも重要な変化と意義をもたらしたと言うことができよう。

ところで、最後に左の一首について付言しておきたい。

雲林院の木かげにたたずみて

30わび人のわきて立ち寄る木の下は たのむかけなく紅葉散りけり

この歌について、かつて阿部秋生氏(注10参照)は、第三句「木の下」の比喻として「叡山の仏法、天台の教学」の意であるとされ、八世にありわびて出家した遍照などの立ち寄る木Vと考えられた。そうして、それによって下句を「叡

山の仏法もわび人をかばひ雨露を凌がしてくるものではなかつた云々」と解され、同首の意義を説明された。増田氏（前掲論文）もこれに従われ、このような独詠歌が他に残されていない旨を述べておられる。右の見解に従うならば、同首は遍照の仏教者としての立場を或る程度鮮明にしているものと言え、それなりの意義を持つ一首ともなり得るのだが、阿部俊子氏（前掲書）は、仁明天皇子常康親王と雲林院及び遍照との関係を論じられた上で、「（この一首は）貞観十一年の秋、常康親王の薨去を追悼してこの感懐をもらしたのではないか」とされた。この二種の異なつた解釈に就いて言うならば、稿者は阿部俊子氏の御所説に従うものである。と言うのも、阿部秋生氏説では、(1)同首が雲林院において詠まれる必然性がうまく説明されないこと、(2)「わび人」を一家人遍照にあてはめるのは正しいとしても、彼が立ち寄る八木の下Vが直ちに八天台の教学Vに結びつくものかどうか確証を求め得ないこと、等の理由による。「わび人」という表現は万葉集には見られず、古今集以降に見られるものだが、同集での使用例は、

母が思ひにてよめる

凡河内躬恒

八四〇 神無月時雨にぬるゝもみち葉は ただわび人の袂なりけり

父が思ひにてよめる

ただみね

八四一 藤衣はつるゝ糸はわび人の 涙の玉の緒とぞなりける

のように、親などに先立たれた境涯にある人という具体的内容を主に持っている。⁽¹¹⁾とすれば、遍照詠の場合常康親王の薨去という状況を設定して解することは、右の「わび人」の使用例からして妥当であろう。しかも常康親王が雲林院宮として同所に住居を定めていたことを加味すれば、同首が雲林院での詠であることにも納得がいく。したがって「頼む蔭なく紅葉散る」とは常康親王の死を具体的には指していることにならう。高貴な身分の方を八立ち寄る木Vと表現す

る例が、

躬恒が院によみて奉りける

立ち寄らむ木の下もなきつたの身は　ときはながらに秋ぞ悲しき（大和物語、三十三）
の如くあり、また『古今集』（雑体、一〇〇六）には、

七条の後失せ給ひけるによめる　伊勢

——（略）——秋のみみちと　人びとは　をのがちり／＼　別れなば　頼むかげなく　なりはてて——（略）——
の如く、人の死をめぐってへ頼む蔭なしと表現する同類の例が見えている。あるいはまた、次の『拾遺集』（哀傷、一三二）の一首、

子ふたり侍りける人の、一人は春まかりかくれ、いま一人は秋なくなりけるを人のとぶらひて侍りければ

（よみ人しらす）

春は花秋は紅葉と散りはて、立ち隠るべきこの本もなし
も、同様な状況下での同類表現とみることができよう。

したがって右の30番歌に関する限り、それを遍照の仏教的述懐歌として読むことは適当でないと思われ、哀傷歌として考えるべきである。

さて、この30番歌は別にしても、既述の如く遍照詠には仏教的色彩が濃厚に見られると言え、それはやはり遍照詠歌の特質と言うことができよう。

以上に考察してきた遍照詠歌の諸特質―古代性(時代性)、即興性、口語的表現、洒脱性、仏教性―は、それらが個別に遍照詠の中に存するのではなく、何らかの関連を帯びて併存しているはずであり、それらの重なりの上に遍照という歌人を位置づけてみるべきであろう。そうしてそれをふまえた上で、それが後代どのように評価され、和歌史の上でどのような意味を持つのかという点への究明がなされねばならないであろう。

注

- (1) 八へんじょうは、『三十六人歌仙伝』によれば、遍昭(定家流)、遍照(顕昭説)と両様に記されるが、仏教用語としては八遍照(寺院名や遍照金剛の如き名)を用いるのが普通であるから、ここでもそれに従うべきであろう。
- (2) 峯岸義秋氏も伊勢詠は遍照詠の影響下にあると見ておられるらしく、『歌合集』(日本古典全書、昭22)該当部頭注にその旨を記されている。
- (3) 竹岡正夫氏は、「マク」を「からみつける、まといつける」の意とし、「桜を山風に吹きつけさせる」と解しておられる(『古今和歌集全評釈』該当歌参照)。
- (4) これについても竹岡氏は異解を示され、「花がひどく散り乱れているその中にまぎれ込んで」の意とされた。このような解釈のゆれは、用例の少なさによる意味把握の困難さが原因となっているよう。
- (5) 『古今集以前』(塙選書81、昭51)二三〇〜二三二頁。小島氏は漢詩における八偷の用例と比較考察されている。
- (6) 拾遺集では、忠岑詠のナラビのうちの一首となっているが不審である。或いは作者名が脱落したものであるうか。中院通茂臨模定家自筆本(天福元年本系。片桐洋一『拾遺和歌集の研究』所収)の当該歌は、歌の右肩に「古今恋五遍昭」と注記する。
- (7) 古今集(秋上、二二六)では八題しらずとなつてゐるから、同集による限りでは作歌事情は不明なのであり、その意味では「墮落する」の意を重く見る必要があるかもしれない。また『遍照集』詞書が、元來現存本のような形であつたかどうかも疑わしく、この詞書は同集及び同首の受容過程で整理され附加されていった可能性も濃い。
- (8) 古今集では、例えば元永本などは「うたてあるさまの」となつてゐる。

(9) たとえば、

月夜にかれこれして

上野 峯雄

おしなべて峯も平になりなむ 山のはなくば月も隠れじ(後撰集、雑三、一二五〇)

善祐法師ながされて侍りける時母のいひ遣しける

なく泪よはみな海となりなむ おなじ渚に流れ寄るべく(拾遺集、恋五、九二五)

(10) 『源氏物語研究序説 上』(東京大学出版会、一九五九)五三九―五四〇頁。

(11) この詞書の確実性については疑わしく、すでに注(7)において述べたとおりであるが、『遍照集』という作品自体の読み方として、ひとまずここでは詞書に従っておきたい。

(12) 同首の第五句「あざむく」が漢詩的表現であることについては、すでに小島憲之氏の御指摘がある(『上代日本文学と中国文学 下』(塙書房、昭40。一八三〇頁)その意味では、巻頭歌と同様な取り扱いをしてよいであろう。

(13) 風巻景次郎氏も両首の関係を指摘されている(岩波古典大系『山家集』七八番歌頭注)。また、久保田淳『山家集入門』(有斐閣、昭53)其他にも同様な指摘がある。

(14) 遍照集には27にも「わび人」という用語がみえる。

ならにまかる道に、荒れたる家に女の琴ひき侍りしをきゝて、いひ入れ侍りし
わび人の住むべき宿と聞くからに なげきくははる琴の音ぞする
ここでは後見人に死なれたような人の意か。